

水彩 Technique。



メディウム！

水彩でも油絵のような技法を駆使したいというアーティストが多い。ホルベインは新たに11種類の高品質な水彩用メディウムを発表します。絵具の透明度を高めたり、にじみを抑えたり、画面にきらめきを与えたり、紙のはじきを抑えたり、白抜きをしたり、部分をマスキングをしたり、どちらかといえば保守的なイメージの水彩が変わっていくはずです。

<ホルベイン水彩用メディウム シリーズ> オックスゴール/サイジング リキッド/ウォーターカラーメディウム/アラビアゴム メディウム/アラビアゴム ベースト/イリデッセント メディウム/マスキングインク/マスキング インク クリーナー/水彩画 保護ワニス/UVグロス パーニッシュ/UVマット パーニッシュ

ホルベイン工業株式会社 東京都豊島区東池袋2-18-4 TEL.03(3983)9251 大阪府東大阪市土小阪1-3-20 TEL.06(6723)1554



holbein

www.holbein-works.co.jp

holbein

内田あぐり

吊された肢体と踊るルンバ

鷹見明彦 || 文 森田兼次 || 写真 *



1978年、東京・福生の「ジャバマ・ハイツ」にて。娘の亜里(7か月)と。米軍・横田基地周辺のハウスには、ベトナム戦争の終結後、多くの若者たちやアーティストとその卵たちが住みついた。隣りには売れる前のPCサクセッションがいて、遊びに来た忌野清志郎がじっと制作を見て「絵を描くのは退屈そうだから、やっぱり音楽をやる」とつぶやいて帰って行ったらしい



女人群図・1975
麻紙に岩絵具、墨
230 x 330cm

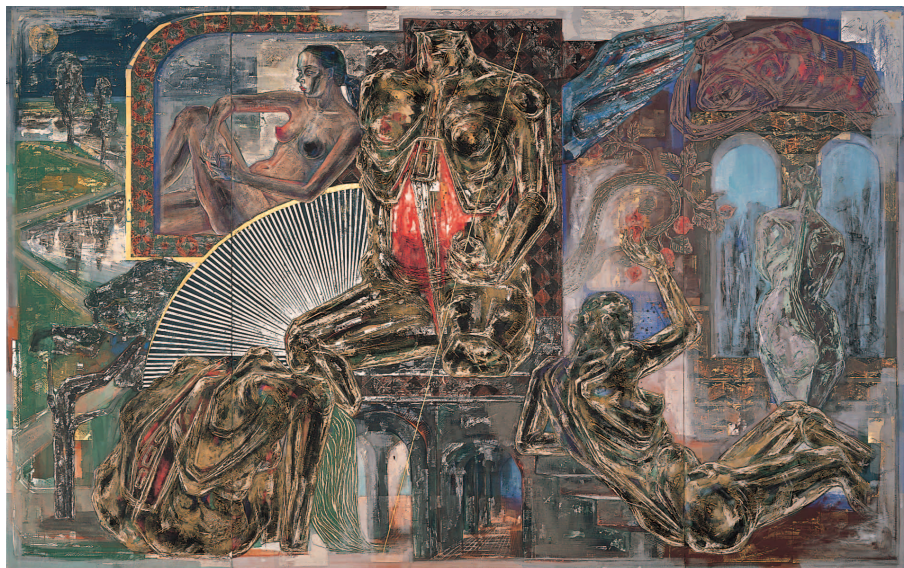
1975 「汚いとか、モラルがないとか、ずいぶん非難されて、評価は両極端でした」

「雑司ヶ谷の鬼子母神に健康な子に育つようにと、願をかけたと聞いています。むかしは、この子でもう出産はおしまいという意味もあつたようですが」。話の糸口に名前の由来を訊ねてみた。激情が底光りするドラマチックな作品からすると、一見もの静かな面ざしと声。冬の手が射すアトリエの床の隅には、蜘蛛の死骸が丸まっている。

「ずつとピアノを習っていて、17歳でやめました。それから油絵を描き出しましたが、日本画出身の美術の先生に、墨のテッサンの授業で線をほめられたりして、教科書のいちばん後ろの日本画のページで、宗達の《風神雷神図》を見て、日本画という分野があるのを知りました」。

「受験も最初は、油絵もデザイン科も受けたんです。石膏テッサンが嫌いだっただで、瓶などのモチーフを着彩で描く武蔵美は、わたし向きでした」。

1969年、武蔵野美術大学日本画科に入学するが、学園紛争で



上 地への邂逅 1993 麻紙に岩絵具、墨、箔
227.3×363.6cm

下 吊された男#01K 2001 楮紙に岩絵具、墨、
膠、布、シナベニヤ 240×480cm 撮影=柳場大
旧青梅織物協同組合工場跡でのインスタレーション
(2003年9月、アートプログラム青梅 東京 1)

1993 「もっと人体の内側にはいり込みたくて、
胡粉や箔でマチエールをつかって、削り出しました」

大学はロククアウトがつづいた。機
動隊に通行証を見せて、木戸を開
けてもらって学内に入りました。
「日本画の授業は、いまもそうです
が、最初はユリを鉛筆で写生して、
それを本紙にトレスした上を
鉄線描てつせんびょうでくり返し描いたり、岩絵
具は、なかなか使わせてもらえず、
泥絵具でいでぬりえのように写生画を
描かされるので、わたしには苦痛で
した」。大学の封鎖期間には、家で
自画像や友人を描いたり、高円寺
にあったフォルム研究所にクローキー
を描きに通った。



「モデルが台の上でポーズするデッ
サンは苦手だ。たけれど、クローキー
は好きで、友だちにモデルになっ
てもらったりして、よく描きました。
「わたしの絵のモノクロの肌の人物
を観て、麻田鷹司先生は『精神的
な陰影を描くように』と言われた
り、断片的に示唆をいただきました」。

《女人群図》(1975)は、大学
院の修了制作を第1回創画展に出
品して、創画会賞を受賞した作品。
強烈な描力と表現性をともなうた
女性像は、肌もあらわなヌードへと
進んだことや、若い新人の女性画家
であるのも手伝って注目を集めた。
『女の情念』と『女の業』を描く
なんて、さんざん言われて笑)。汚
いとかモラルがないとか、日本画の
主流からはずいぶん非難されて、評
価は両極端でした。
「子どもができてお腹が大きくな
ると、絵を床に置いた状態では苦
しくて描けないので、テーブルの上
で描いたり……。妊せむいることで、身
をもって描くことや身体的な感覚を



continue #051 2005～ 麻紙、紙に顔料、墨、ペルト 240×360cm 撮影=柳場大

2005

「断ち切ったところに生まれる、つながりを呼びよせてく。もっとダイレクトで、リアルな……」

《地への邂逅》(1993)は、山種美術館賞展大賞の受賞作を含むこの時期のシリーズの1点。「絵画のなかで、ドラマをつくりたいと思いましたが、人物を風景や建築のセツトに組み込むのは、むずかしくて、人体をトルゾにして形体もシンプルにしました。もっと身体の内側にはいり込みたくて、筆で絵具を置くだけでなく、ごみん胡粉や箔はくでマチキールをつ

じめて、その後は、人間を風景や空間の内に構成した、重厚で装飾性に富んだバロック的な画面をつくるようになった。

80年代の半ばに裸の男を描きはじめて、その後は、人間を風景や空間の内に構成した、重厚で装飾性に富んだバロック的な画面をつくるようになった。

「順調にキャリアを積んでいくように見えたが、80年代に入ると、自分で行き詰まりを感じるようになって、テクニクで描いてしまっているのがわかって、一時期、描けなくなりました。モデルも、大学を出てから住んでいた福生のハウスのまわり

にいた娘たちを描いていたのに、いつの間にか皆きれいな女ばかりになって、描きたい女がいなくなつた。」



RUBBISH/可燃性廃棄物 2003-05 ポスト・バック、顔料、オイルパステルほか 撮影=内田亜里

くつて削り出しました。」

「文化庁の在外研修で、地方に土着化したロマネスクの壁画が残るピレネーやスペインのカタルーニャの村々を訪ねて、地下墓所などを観て歩いたのも、このころです。」

《吊された男》#01×2001(2000)は、パネルを連結して横長に構成する近作の1点。近年は、女性像は姿を隠して、男の人体も解体をはじめた。この「吊された男」のシリーズで、2002年には、第1回東山魁夷記念日経日本画大賞を受賞した。「浮遊している人体のかたちは、ビル建設現場で見かけた高い足場の上で働くアクロバティックな姿



葉山・一色のアトリエで。制作はパネルの上に乗って、描くだけでなく、洗ったり、貼ったり、削ったり、縫ったりして行う。顔料、岩絵具、墨、膠、水などによる和紙とのデリケートな作業と時にラッシュな行為のバランスに、身体と五感のニューロネットに触れる表現が生まれぬ*]

うちだ・あぐり 1949年東京都生まれ。73年武蔵野美術大学造形学部日本画科卒業。75年同大学院修了。同年創画会賞受賞(87,97年)。93年文化庁在外研修で渡仏。第12回山種美術館賞展大賞受賞。2002年第1回東山魁夷記念日経日本画大賞受賞。現在、武蔵野美術大学日本画科教授。主な個展に76年みゆき画廊(東京)、82年東京セントラル絵画館、86年俵屋画廊(京都)、92,98年日本橋三越(東京)、98,01年キッド・アイラック・ホール(東京)、05年中京大学アートギャラリーC・スクエア(名古屋)、ギャラリー名芳源(名古屋)など。主なグループ展は、71-73年新制作展(東京都美術館)、74-02年創画展(東京都美術館ほか)、79,83,93年山種美術館賞展(山種美術館、東京)、83年「裸体画100年の歩み(国立国際美術館、大阪)、88年「日本画の裸婦展(埼玉県立近代美術館)、90-05年「両洋の眼(日本橋三越、東京ほか)、94年「現代日本画の展開(富山県立近代美術館)、99,02年「DOMANI・明日展(安田火災東郷青児美術館、東京)、01年「韓国、日本、中国の現代墨絵展(韓国国立現代美術館、ソウル)、02年「秋野不矩とゆかりの作家展(天竜市立秋野不矩美術館、静岡)、03,04年「アートプログラム青梅(東京)など。

態がもとになっています。』

《Continue #05》(2005)は、ロンドン・ニューヨーク、メキシコ、ベルなどを巡遊した長旅の後に描かれたところある未完の最近作。描線や顔料の発色と端ぎれの文様、ヘルトなどの「ソーシユ」が絡まりながら、隙間に手ざわりのある空間を息づかせている。帰国後の個展では、タフローと一緒に滞在先で入手した画材で郵便パックや、ありあわせの紙に描

いたドロ잉、梱包材、スナップ写真などで移動と制作の様態を再現したインスタレーションも見られた。

「空間の連なりよりも、断ち切ったところに生まれる繋がりと呼びよせたくて。もっとダイレクトでリアルな……。メキシコの下町のストリートに生きる人たちの絶望のなかにある生や音楽のかがやき、飢えた野良犬たちの姿が忘れられない。」

話を聴くうちに夜になって、最初に見せられた20数年前のスナップ写真に赤ん坊として写っていた娘さんが帰ってきた。同行したカメラマンの申し出に応じて、アトリエの絵をセプトに記念撮影をする2人の、姉妹のようにも女ともだちのようにも映る姿や声を聞いていると、その場がイサベル・アジエンデの「精霊たちの家」の一部屋のように、魔術的リアリズムの時空へと繰り込まれていくのだった。

たかみ・あきひら「美術評論家」

2005年12月10日 神奈川県三浦郡葉山町の作家アトリエにて取材